

---

# 川を越えて

麻道一縷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
川を越えて

【Nコード】  
N5546A

【作者名】  
麻道一縷

【あらすじ】  
人の役割とか、そういうの、初参戦なんで拙いです。

## 始め

「人間一度は死ぬんだ、それが遅いか早いかだけの違いだ」

男は虚ろな目をしていた。

「だが、死ねない人間は不幸だ、死ななきゃ生は理解出来ない」

少女は黙っていた。

「だから教えてやろう、死ねないお前に、『死』を除く全ての苦しみを…… 今生にして全てを悟れ、あまたの『病』を『呪』を」

男は虚ろな目をしていた。

「その上で探るが良い、そなたにふりかかる『幸』と言う名のまやかしを」

少女は哀しげに目を伏せた。

少女はアスラ……

男はヴァルナ……

アスラは世界に最も愛された美しき人間の王。

その身はただれ、歪み、嘗ての美しき面影は消え……

その美しさを知る者はヴァルナだけになった。

ヴァルナはアスラを独占する事に成功したのだ。

だが、アスラは死なないが故に人間ではない。

世界に過剰な愛を与えられ、それにより人間を超越したのだ。

世界をミトラと言う。

それもまた人間の姿をしていた。

ミトラはヴァルナに『死』を与えた。

ヴァルナが、アスラの『美』を奪ったからである。

ミトラはアスラの美しさを永遠のものとしたが、それはヴァルナにより、『永遠の醜』に変えられた。

ヴァルナは『死』を手に入れたが故に人間となった。

だが、彼は満足した。

全てを知ったからである。

ヴァルナの目は輝いた、ミトラは意に反して彼の願って止まない『全』を与えてしまったからだ。

そして、ヴァルナは死したわけだが、彼の持つ知識は死を超越していたために、復活する。 199X年の頃、ヴァルナは幾度目かの復活を遂げた。

生まれながらにして『全』を知る、いや、知るだけではない、彼の能力は常識を超えている。

「この子の名前、アキにしないか？ 清らかつて書いてアキ」  
「良い名前、そうしましょう」

彼は人を超越していたが神では無かった。

日本、彼がこの国に生まれたのは初めてではなかったが、なんと変わった事だろうと、まだ開かぬ瞳のまま、あげた産声と共に思った事は仕方の無い事である。

年を経ることにその思いは強くなるが、その理由に至らぬ程に愚かでは無い。

彼は『全』てを知る者で無ければならないが、未来にして新しく生まれるはその『全』てに含まれるはずもない。

彼は時間と共に増加し、消滅していくものを追い求めるのだ。

さて、そろそろ彼の自慢話にも、その生い立ちにも飽きが来たのではないか？

彼自身、小学一年生の春、将来なりたいもの、と言う題の作文で次の様に述べている。

全く、彼が今生『アキ』と名付けられたのは偶然ではないようだ。

「僕は超人になりたい。ツアラトウストラはかく語りき、

「私は超人を教えよう」

その超人になりたい。

ニーチェは

「神は死んだ」

と言いました、そして、彼は最期に道端の馬に微笑みかけて何事か囁きながら狂い死んだ。

もし、僕が結核で死んだなら、その生の本質は文学者である。

狂い死んだならば、その生の本質は哲学者である。

知識を求めるのに飽き、そして知識を太陽が光輝く様に人々に振り撒く人を超人と言うなら、僕は超人になりたい。

書を記し文学者になりたい。

人々を導き、教師になりたい。

真実を追い求める哲学者でありたい。

故に超人になりたい、その先にあるものを見たいのだ」

これを聞いた者は嘲笑し或いは啞然とした。

ここからが本当の物語の始まりだ。

## 次

清<sup>アキ</sup>は不思議な子だった。

学校に来ていつも静かに窓の外を見ている。

そのくせ口を開けばマシنگンの様に言葉が飛び出し、教師ですらその場から逃げ出す。

彼は昔から孤独を好んだが、気まぐれに他人に接触する。

……時には微笑みを浮かべ、時には苦虫を噛み潰した様な顔で私は彼と幼稚園からの付き合いだが、その本質は全く理解出来ない。

時折そのミステリアスな一面に惹かれる事もあるが、友人が彼に御執心なので無視している。

人生史上、最も大切な友人だ。

私がその『友人』と親しくなったきっかけも、直接的ではないにしろ、やはり彼の所為と言って良かった。

「家に来ない？ パジャマパーティー！」

髪の長い、円な目をした女の子が私に言ってきた。

いつも数人の女子と雑誌を見たりしながらお喋りをして、楽しそうな笑い声を教室に響かせている。

……はつきりと言って、私のスタンスとは対極にいる。

現に彼女が私にそう切り出した時に、取り巻きの連中は怪訝な顔で私を見ていた。

「あの子達は行くの？ どうも私に御不満のようだけど？」

少し意地悪く微笑んで言った。

因みに私も、彼女自身には興味を持っていたが、その周りの子は嫌いだった。

すると彼女は少し頬を紅くして、

「清君って、どんな人なの？」

私に、小声でそう尋ねてきた、目は期待に満ちて輝いていた。そういう事か、と内心私は楽しくて仕方がなかった、この女はあの取り巻きを捨ててでも彼の情報が欲しいのだ。

私と表面上だけでも仲良くする以上、あの取り巻きとは一緒にいられない。

……いられては困る。

今まであの下品な連中が、どれ程私を罵り、嘲り、愚にもつかない噂を流してくれた事か。

「そのパーティーは二人きりってわけね」

私の微笑みに、彼女はにっこりとした笑顔で応えた。

初めて彼女の部屋に案内された時、私はかなり驚いたものだ。

「どうかした？」

固まっている私を、彼女は振り返り見つめて来た。

「すごい部屋、全然予想と違ったから驚いたわ」

まず、壁が本棚で見えない、窓をさけるようにして、部屋の四方が本で埋まっている。

次に、机と椅子にはキャスターがついていてクルクルと部屋中を自由に移動出来る仕掛けになっており、その机上には鏡と沢山の小瓶が並んでいる。

……机を動かしたら倒れるのじゃないだろうか、私はそう思い注意深くそれを見つめた。

「なるほど、少し机に凹みがあるんだ」

私はその仕組みに気が付いた時に思わず声をあげてしまった。

「あつ、鏡の事？ 瓶も同じ仕組みになってるんだよ」

私はその部屋の機能性に感服し、彼女は些細な質問にも嫌な顔一つせずに応えてくれた。

「君は不思議な子だ、世間は君を少女趣味でぬいぐるみに囲まれた生活をしていると思っている」

ベッドに横になって、彼女をみながらそう言った。

「そうね、その方が生きていく上で楽なもの」

彼女の瞳に、いつもの彼女にはない類の輝きが宿る。

「互いに同類と言うわけか」

私達は似たものどうしだった。

ただ、世間からの認知のされかたが全く逆だった。

私は小学校や中学校、はたまた幼稚園のアルバムまでを彼女に貸した。

私の知らない事や、気付かない様な事でも、きっと彼女なら探し出すだろう。

あいつの何が良いのか私には分からないが、とりあえず高2の夏で受験まで後一年だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5546a/>

---

川を越えて

2010年12月31日14時43分発行